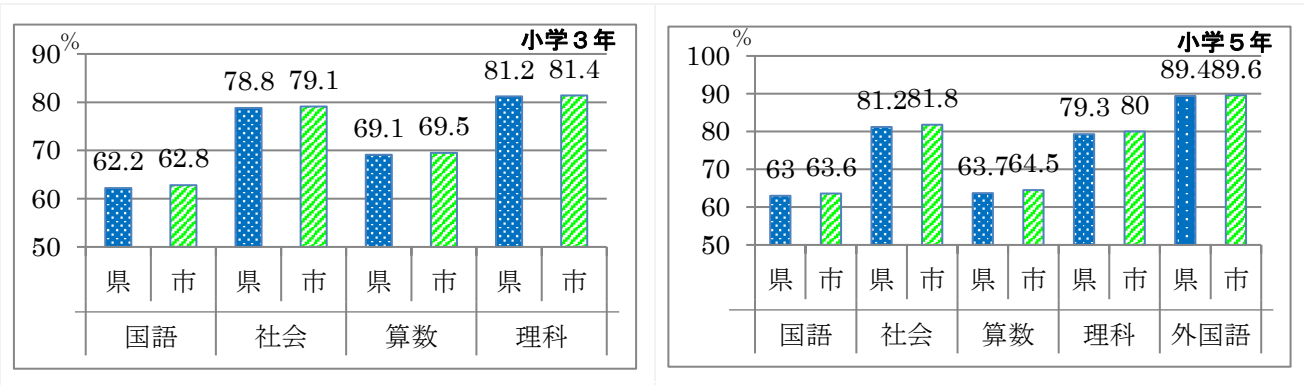


令和2年度千葉市学力状況調査結果概要（小学校版）

1 県と本市の平均得点との比較



○小学3年・5年共に全教科において県平均得点を上回っている。

2 各教科の改善策

【国語】 実生活と結びつけた言語活動の工夫と学習したことを振り返る時間の充実

小学3年

- 伝える相手や目的を明確にし、伝えたいことの内容が聞き手に分かりやすくなるよう、「話すこと・聞くこと」の学習過程の中で、話の構成を検討する学習活動を工夫する。
- 説明文において段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係について、叙述を基に捉えられるような言語活動を工夫する。

小学5年

- 実生活の中で相手や場面に応じて適切に敬語が使えるよう、敬語の役割や必要性を自覚させるような言語活動を工夫する。
- 書く目的や意図を明確にし、表現の効果を確かめたり工夫したりするような必要感がある言語活動を工夫するとともに、学んだ内容を振り返る時間の充実を図る。

【社会】 体験的な活動や具体的な資料の活用を基にした、思考力・判断力・表現力の育成

小学3年

- 見学や観察、聞き取りなどの体験的な活動や、地図・資料による情報の収集活動、情報を白地図などにまとめる活動を通して、学習問題の追究・解決に必要な情報を読み取れるようにする。
- 学習問題の解決に向けて、調べたことや考えたことを文章で記述したり、資料などを用いて説明したりする学習を取り入れる。

小学5年

- 学習問題について追究したことを整理し、まとめたり発表したりする活動を繰り返し行い、知識の再構築を図ることで、社会事象に関する知識や技能の確実な定着を図る。
- 社会の課題や社会への関わり方について考え、判断したりする活動や、それを表現したりする活動を各単元の終末に位置付けることによって、思考力・判断力・表現力を育成する。

【算数】 数学的に表現し伝え合う数学的活動のより一層の充実

小学3年

- 問題解決の過程や事象の根拠を、具体物、図、数、式などを用いて表現する数学的活動を重視する。
- 問題場面を把握し、筋道を立てて順序よく問題を解決できるように、場面ごとに区切ったり、状況を数で表したり立式したりして、思考力・判断力・表現力を育む。

小学5年

- 問題場面を正しく把握したり、問題解決の過程を重視したりするために、図と式などを用いて数学的に表現し伝え合う活動に取り組む。
- 切る・折る・移動する・裏返すなどの操作的活動を通して、一つの図形を多様な見方で捉えられるようにし、豊かな発想で問題解決できるようにする。

【理科】主体的な問題解決学習の充実と科学的な思考力・判断力・表現力の育成

小学3年

- 児童自らが問題意識をもち「理科の見方・考え方」を働かせながら実験・観察を行い、主体的に問題解決を行うことで、科学的な思考力・判断力・表現力を育てる。
- 自然の事物・現象に直接触れる機会（五感を使う）を増やし、そこから見いだされる差異や共通点に気付かせながら、「わかった」「できた」という実感を伴った学習を大切にする。

小学5年

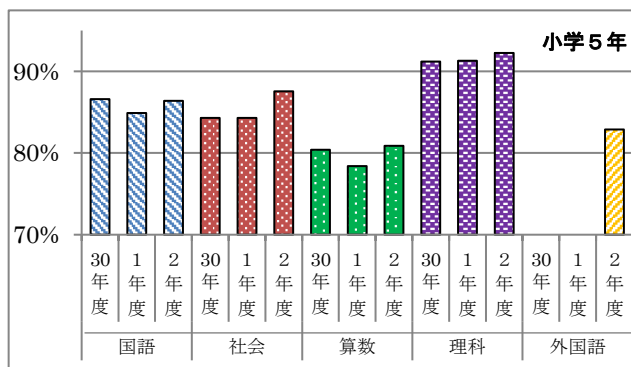
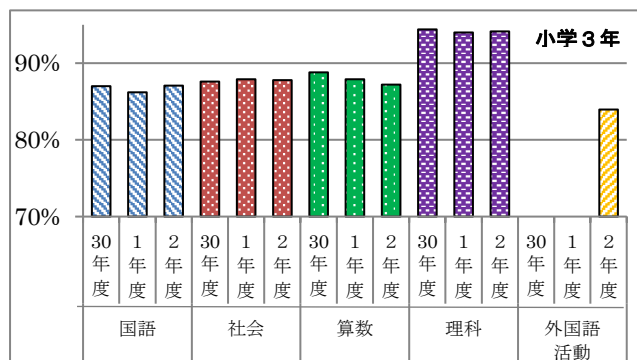
- 実験・観察に使用する器具の正しい操作方法やそれぞれの手順における留意点を確認し、繰り返し実験・観察を行うことで技能を身に付ける。
- 実験・観察の結果を表・図・グラフなどに分かりやすく整理するとともに、それを根拠として考察したものを、ノートに記述したり他者に説明したりしながら表現活動の充実を図る。

【英語】 目的、場面、状況を明確にした言語活動の更なる充実

小学5年

- 題材や場面設定を工夫し、「相手意識」や「目的意識」を持たせ、児童が自分自身に関する出来事や気持ちを伝え合う活動を展開する。
- クラスルームイングリッシュを積極的に取り入れ、視覚教材・教具を効果的に活用することにより、児童が主体的に英語でコミュニケーションがとれるよう指導を工夫する。

3 学習に対する意識（学校の勉強がわかる）



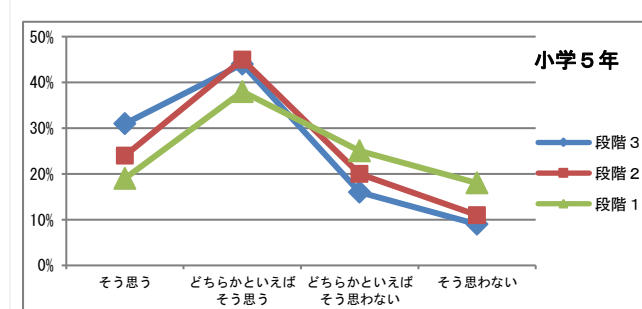
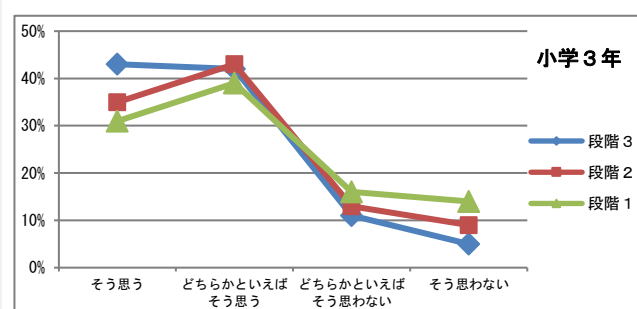
「理科がわかる」割合は92%以上と高い傾向である

小学校3・5年では、「理科の学習がわかる」という回答の割合がそれぞれ94%、92%と高い。前年度と比較して肯定的回答率が向上しているのは、3年の国語と理科、5年の全教科であり、全体を通して、上昇傾向である。3年の社会と算数は、前年度と比べてわずかに低下している。また、「学校の勉強が好きだ」（別データ）の肯定的回答率は前回より、3・5年共に上昇している。

※肯定的回答率とは、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた回答率

4 自己肯定感と学力の関連を示唆

※標準偏差により、成績上位群を段階3、成績中位群を段階2、成績下位群を段階1としている。



「成績上位群」は自分のことを肯定的に捉える傾向がある

「自分によいところがあると思いますか」の問いに対し、「成績上位群」は自分のことを肯定的に捉えている傾向があり、「成績下位群」は自分のことを否定的に捉えている傾向がある。また、学年が上がるにつれて、自分を肯定的に捉える児童が減少し、自分を否定的に捉える児童が増加する傾向が伺える。「家族からほめられていますか」（別データ）については、「成績上位群」ほど、肯定的回答が多くなっている。